

堀尾重治 (著)

骨・関節 X 線写真の撮りかたと見かた (第 8 版)

小寺吉衛

名大教授・放射線科学

本書が第 8 版と何って驚くとともに著者堀尾重治氏の不断努力と研鑽に敬服するばかりである。医用画像機器の進歩発展は著しく、その撮影法や読影法は刻々変化している。その中で、このような書を長く世に送り出すためには並々ならぬ力量が必要であることは言うまでもない。

本書を見てまず目に付くのは図が大変明瞭でわかりやすいことである。部位ごとに解剖図、撮影法、画像があり、それらの部位で考えられる疾患の画像として単純 X 線像が、必要であれば CT 像、MR 像が繊細なタッチで描画されている。解剖図も画像も、すべての図が著者の手によって描かれているのが本書の大きな特徴であり、病態のとらえかたが初心者にも理解しやすい。また随所に参考・note というコラムや表があり、症状の解説や読影のポイントなどが記述されている。

医用画像は診断・治療に用いられることは言うまでもない。読影医は平面の画像から生体患部を立体的に読み取るため、その画像がどのように撮影されたかが肝要となる。撮影角度がわずかに変わっ

ても、各組織の重なりが異なってくることから見え方も変化する。したがって、撮影者と読影者の間には強い信頼関係がなければならない。この関係は一朝一夕に生まれるものではない。本書『骨・関節 X 線写真の撮りかたと見かた』は 1986 年に初版が出てから 24 年、その前身の書『骨単純撮影法と X 線解剖図譜』から数えると 39 年の長きにわたって撮影法と画像の見かたについての書としてこの世界に送り出されてきた。その間、医用画像はアナログからデジタルに代わり、診断の主流も CT や MRI に移っていったが、本書は改訂を重ね、その都度変化に対応しながら多くの方々の期待に応えてきた。この書が撮影者と読影者の強い支持を受けていることがわかる。

画像を評価するにはコントラスト、鮮鋭度、雑音特性などの画質因子を用いる。これまでの医用画像では主に高コントラストで高鮮鋭の画像が望まれていたが、最近は淡いがんなどの陰影の描出が主体となっていることから、SN 比 (信号対雑音比) で評価することが多くなっている。今回の改訂では、

画像に生じる微妙な濃淡の変化から病理変化を推定するために必要な知識を重点的に盛り込んでいるということで時代に即した内容になっている。

本書は、撮影法を勉強する診療放射線技師のみならず読影を行う者にとっても大変わかりやすい書になっている。また、骨・関節部の画像ということから、リハビリテーションに携わる方にも良好の書といえるであろう。ちょうど、本年 (2010 年) 4 月 30 日付けの厚生労働省医政局長名で各都道府県知事あてに「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」が発令された。その中に、各医療スタッフが実施することができる業務の具体例として、診療放射線技師は、画像診断における読影の補助を行うこと、放射線検査等に関する説明・相談を行うこと、が挙げられている。まさに、本書はこの局長通知に呼応した最適の書である。

●B5/頁 480/2010 年/定価 6,510 円
(本体 6,200 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00994-2]
医学書院 刊